

# “I Remember Grandpa”の authorship を考える(1)

## —文体上の特徴を手がかりとして—

大 園 弘

はじめに

“I Remember Grandpa” (1985)は Truman Capote(1924-84)の遺作であるとされている。「遺作である」と断定できないのは、この作品の出版経緯を記した以下の解説に、やや疑問が残るからである。

「17歳の母のもとに生まれた Truman Capote は、最初の7年間を母の末の妹 Marie Rudisill を含む叔母や従弟たちとともに過ごした。初老の従弟 Bud は、この物語のおじいさんのモデルである。Bud の妹 Sook は『クリスマスの思い出』に登場する初老の従姉のモデルである。

1946年、Rudisill 夫人を訪ねた際、当時22歳で *Other Voices, Other Rooms* を執筆中だった Capote は、従兄の Bud を大好きだった彼女のために、『おじいさんの思い出』を贈り物として執筆した。彼女が、この物語をどうしてほしいの、と尋ねたところ、若き著者は『おばさんが好きなようにしていいよ。だって、将来、ぼくは有名になるかも知れないからね』と答えた。

実際、Capote は有名人になった。1984年、彼が亡くなると、Rudisill 夫人は書類の中に埋もれたまま、久しく忘れられていた原稿を見つけた。彼女はこの物語が世に公開されるべきであると感じた。『どの作家であれ、初期の作品が最もピュアである』との理由による。Rudisill 夫人にとって、『お

じいさんの思い出』は、祖父と慕うようになった従兄に対する Capote の愛情と、家庭生活や希望に満ちた喜びが失望感へと変わっていった若き作家の心の裡が巧みに表現された作品である。」<sup>(1)</sup>

作品の末尾に添えられたこの解説は、“I Remember Grandpa” を出版した *Peachtree Publishers* の編集者によるものと思われるが、上掲第 1 段落の記述は、概ね事実を反映している。だが、第 2・第 3 段落の記述を文字どおりに受け入れるのは難しい。

1946 年当時、Capote は数編の短編小説の発表をとおして、新進気鋭の小説家として文壇にその名を馳せはじめていた。引用文中に記されているとおり、処女中編小説 *Other Voices, Other Rooms* の執筆中の頃である。「おばあさん」のモデルである Sook (Nanny Rumbley Faulk) が 1946 年に他界したばかりであったことを考えれば—「おじいさん」のモデルである Bud (John Byron Faulk) の没年は 1934 年である—、Capote が亡き両者への想いを辿りながら “I Remember Grandpa” を執筆した可能性は高い。

しかし、仮にそうだとすると、世間の注目を集めはじめたばかりの若手作家が、そもそも、その大切な原稿をさほど親しくもなかった叔母への贈り物とするであろうか。しかも、その叔母 (Marie Rudisill) は Capote 関連の伝記文学でも殆んど言及されることのない「マイナー」な人物であるばかりか、Capote の晩年には *Truman Capote: The Story of His Bizarre and Exotic Boyhood by an Aunt Who Helped Raise Him* (1983) という奇抜なタイトルの評伝を著し、Capote 本人のみならず、親族の面々からも酷評を受ける運命にある人物でもある。<sup>(2)</sup> Capote の少年時代、Bud と Sook が彼にとってかけがえのない存在であったことは数々の文献や作品から判断する限り、明白な事実である。そうだとすれば、この両者をモデルとした作品原稿は、Capote が自ら保管し推敲を重ねていたか、書き下ろしの新作として得意先の雑誌社に寄稿していたか、あるいは、Capote の幼少期に彼の面倒を見てくれた叔母の Mary Ida—Capote

の母 Lillie Mae の妹で Rudisill の姉にあたる一であったと考えるのがむしろ自然であろう。<sup>(3)</sup>

また、「Capote の死後、Rudisill 夫人が書類の中に埋もれたまま、久しく忘れられていた原稿を見つけた」という引用文第3段落のエピソードも俄かには信じがたい。Rudisill が *Peachtree* 社に持ち込んだタイプ原稿には手書きの書き込みは皆無であったうえ、Capote 作であるという証拠も示されなかったとされており、大著 *Capote: A Biography*(1988)の著者である Gerald Clarke は「Capote は明らかに(この作品の)作者ではない」と言い切ってさえいる。<sup>(4)</sup>

“I Remember Grandpa” は Capote の死後に出版された。Capote の死後、彼がこの作品の著者であるかどうかは、Rudisill のみぞ知るところとなったが、彼女の死去(2006年11月3日)により、“I Remember Grandpa” の authorship —原作者は誰か—をめぐる問題は未解決のまま迷宮入りとなった。「カポーティ作としてとおっている」<sup>(5)</sup>というのが現状である。

“I Remember Grandpa” の authorship について「真実」を知る者が不在のいま、どのような論拠を以ってしても、この作品の著者が Capote である・ないの主張は仮説の域を越えることはない。また、そうした仮説に基づく作品の評価も無意味であろう。だが、その一方で、authorship が判然としないまま、この作品を Capote 作として読むことも疑いの気持ちをもって読むことも、Capote の読者としては釈然としないのもまた事実である。

よって本稿では、Capote 小説の文体上の特徴を手がかりとして、“I Remember Grandpa” の authorship について考えてみたい。

## I Capote 小説の特徴：コロン／セミコロン

コロン(colon)やセミコロン(semicolon)は、例示や補足説明等の伝達機能を備えた、書き言葉(written English)特有の「ツール」であり、これらの句読点は小説家の文体を特徴づける一要因になるものと考えられる。Capote の小説

全般には、コロン及びセミコロンが数多く用いられているようである。

〔表1〕は、*The Penguin Book of American Short Stories*(1969)の265頁から418頁にかけて収録されている9名の小説家の短編小説におけるコロンとセミコロン、及びその両者の使用頻度をまとめたものである。括弧内の数字は1頁当りの使用回数を表している。この表には数々の傾向が観て取れるが、コロン／セミコロンの使用頻度ともに Capote(“Children on Their Birthdays”)が最も高く(1.65回／3.71回)、コロン・セミコロンを合わせた使用頻度については、Capote が突出している(5.35回)。

〔表1〕<sup>(6)</sup>

著者名	作品名(発表年)	総頁数	① colon の使用回数(頁当り)	② semicolon の使用回数(頁当り)	①+②(頁当り)
J. London	“To Build a Fire” (1908)	15	2 回(0.13回)	23回(1.53回)	25回(1.66回)
S. Anderson	“Death in the Woods” (1933)	12	0 回(0 回)	3 回(0.25回)	3 回(0.25回)
R. Lardner	“Who Dealt?” (1929)	10	1 回(0.1回)	20回(2 回)	21回(2.1回)
K. A. Porter	“Flowering Judas” (1935)	12	18回(1.5回)	8 回(0.66回)	26回(2.17回)
F.S.Fitzgerald	“The Rich Boy” (1926)	36	19回(0.53回)	28回(0.78回)	47回(1.3回)
W. Faulkner	“Delta Autumn” (1942)	22	35回(1.59回)	26回(1.18回)	61回(2.77回)
E.Hemingway	“The Battler” (1924)	8	1 回(0.13回)	0 回(0 回)	1 回(0.13回)
B. Malamud	“The Jewbird” (1963)	8	0 回(0 回)	3 回(0.38回)	3 回(0.38回)
T. Capote	“Children on Their Birthdays” (1948)	17	28回(1.65回)	68回(4 回)	96回(5.65回)

〔表2〕は Capote の他の短編小説について、同じくコロンとセミコロン、及びその両者の使用頻度をまとめたものである。対象とした作品は“I Remember Grandpa”のタイプ原稿が Rudisill に贈られたとされる1946年前後に発表された8編に、“I Remember Grandpa”と同系列の自伝的短編小説“A Christmas Memory”(1956)、“The Thanksgiving Visitor”(1967)、“One Christmas”(1982)を加えた11編である。11編のコロンとセミコロン、及びその両者の使用頻度の平均値は、1頁当り、それぞれ1.88回、2.6回、4.48回であり、“My Side of the Matter”(1945)を例外として、Capote の作品ではコロン／セミコロンの使用頻度：がやはり高いことがわかる。<sup>(7)</sup>

〔表2〕

作品名(発表年)	総頁数	① colon の使用回数(頁当り)	② semicolon の使用回数(頁当り)	① + ② ((頁当り))
“Jug of Silver” (1945)	16	24回(1.5回)	20回(1.2回)	44回(2.75回)
“Miriam” (1945)	13	19回(1.46回)	50回(3.85回)	69回(5.31回)
“My Side of the Matter” (1945)	11	3回(0.27回)	1回(0.09回)	4回(0.36回)
“Preacher’s Legend” (1945)	13	11回(0.85回)	26回(2回)	37回(2.85回)
“A Tree of Night” (1945)	13	29回(2.23回)	21回(1.61回)	50回(3.85回)
“The Headless Hawk” (1946)	26	48回(1.85回)	75回(2.88回)	123回(4.73回)
“Shut a Final Door” (1947)	17	51回(3回)	42回(2.47回)	93回(5.47回)
“Children on Their Birthdays” (1948)	17	28回(1.65回)	63回(3.71回)	91回(5.35回)
“A Christmas Memory” (1956)	13	53回(4.08回)	40回(3.08回)	93回(7.15回)
“The Thanksgiving Visitor” (1967)	25	37回(1.48回)	92回(3.68回)	129回(5.16回)
“One Christmas” (1982)	11	26回(2.36回)	28回(2.55回)	54回(4.9回)

以上のとおり、コロン及びセミコロンの多用は、明らかに Capote 小説の文体上の特徴だと言えよう。

ところで、“I Remember Grandpa” にはどのぐらいの割合でコロンやセミコロンが使われているであろうか。また、原稿を譲り受けたとされる叔母の Mary Rudisill が著わした *Truman Capote: The Story of His Bizarre and Exotic Boyhood by an Aunt Who Helped Raise Him* authorship の場合はどうであろうか。さらには、これらの作品と Capote の作品ではコロンやセミコロンの使われ方に類似や相違があるのであろうか。以下の各節ではこれらの疑問点を探っていきたい。

## Ⅱ “I Remember Grandpa” 及び Rudisill 著 *Truman Capote* におけるコロン／セミコロンの使用頻度

“I Remember Grandpa” は版画家 Barry Moser—米国の代表的版画家—によるイラスト入りの美装丁で出版されている。37頁構成の同書から挿絵及びキャプションの頁(18頁)を除いた英文テキスト(19頁)を *The Penguin Book of American Short Stories* の頁構成に換算すると、凡そ17頁の短編小説であるとみなしうる。

また、Rudisill 著 *Truman Capote: The Story of His Bizarre and Exotic Boyhood by an Aunt Who Helped Raise Him*(243頁)から写真等の頁を差し引いた残りの英文テキスト(約200頁)を *The Penguin Book of American Short Stories* の頁構成に換算すると、*Truman Capote* は約194頁の伝記とみなしうる。

換算後の“I Remember Grandpa”と *Truman Capote* におけるコロンとセミコロン、及びその両者の使用頻度に、前節で触れた Capote の11短編におけるそれらの平均値を対比したのが〔表3〕である。

〔表3〕

作品名等	総頁数	① colon の使用回数(頁当り)	② semicolon の使用回数(頁当り)	①+②((頁当り))
“I Remember Grandpa”	17	16回(0.94回)	15回(0.88回)	31回(1.82回)
<i>Truman Capote</i>	194	21回(0.11回)	36回(0.19回)	57回(0.29回)
11短編の平均値		(1.88回)	(2.6回)	(4.48回)

〔表3〕からわかるのは、まず、コロンの使用に関しては“I Remember Grandpa”において頁当たりの使用頻度が Capote の11短編の平均値の半分であること、また、セミコロンについては凡そ3分の1であるという点である。この対比のみに注目するならば、“I Remember Grandpa”に Capote 小説の傾向が反映されていると認定することはむずかしい。

しかしその一方で、*Truman Capote* におけるコロン／セミコロンの頁当たりの使用頻度を“I Remember Grandpa”の場合に比較すると、コロンについて

は0.11回対0.94回、セミコロンについては0.19回対0.88回というふうに、こちらにもまた両者に大きな隔たりがあることがわかる。「評伝」・「短編小説」というジャンルの違いを考慮するとしても、両者のこの格差は大きいと見なさざるをえない。つまり、*Truman Capote* の著者 Rudisill が“I Remember Grandpa”の作者であるという仮説も成り立ちがたく、両作品の作者(authorship)は、むしろ別人であるとみるのが妥当ですらある。

以上のように、“I Remember Grandpa”、Capote の11短編(の平均値)、*Truman Capote* におけるコロン／セミコロンの使用頻度から “I Remember Grandpa” の authorship を判断することは困難である。

### Ⅲ “I Remember Grandpa”、その他の作品におけるコロンの使用パターン

このように、コロン／セミコロンの使用頻度が “I Remember Grandpa” の authorship を判断する手段とならないのであれば、それらの使用パターンに判断の手がかりがあるかもしれない。本節では、コロンとセミコロンのうち、用法が多様なコロンに特化し、<sup>(8)</sup> “I Remember Grandpa”、*Truman Capote*、*“A Christmas Memory”* におけるコロンの用法上の特徴を比較する。“A Christmas Memory” を採りあげるのは、(1)この作品が “I Remember Grandpa” 同様、自伝的作品であるうえ、少年の視点から描かれているという共通点を有すること、(2)この作品におけるコロンの使用頻度が〔表2〕にみるように極めて高いために、Capote のコロンの使い方の多様性がもっともよく掴めることの二つの理由による。

まずは、コロンの主たる用法をまとめておきたい。

『言語学百科事典』によると、コロンは「主として、次に続くものがその前のものを補ったり説明したりするものであることを示す。」<sup>(9)</sup> 具体的には、以下のような分類が可能であろう。<sup>(10)</sup>

- (1) コロンの直前の内容の「実例(具体例)」をコロンの後ろに列挙する(「具体例の列挙」)

〔例文〕 Except for skinflint sums persons in the house occasionally provide (a dime is considered very big money); or what we earn ourselves from various activities: holding rummage sales, selling buckets of hand-picked blackberries, jars of homemade jam and apple jelly and peach preserves, rounding up flowers for funerals and weddings. (p. 215. 下線筆者)

- (2) コロンの直前の内容の「原因」・「理由」・「結果」等をコロンの後ろで補足する(「補足説明」)

〔例文〕 Of the ingredients that go into our fruitcakes, whiskey is the most expensive, as well as the hardest to obtain: State forbid its sale. (p. 217. 下線筆者)

- (3) 「すなわち」という意味で、コロンの直前の内容・語・句等を強調／換言する(「強調／換言」)

〔例文〕 Tomorrow the kind of work I like best begins: buying. (p. 215. 下線筆者)

- (4) コロンの後ろに引用符つきのフレーズやセンテンスを導入する(「地の文の引用」)<sup>(11)</sup>

〔例文〕 In answer, my friend gently reflects: “I doubt it. There’s never two of anything.” (p. 222. 下線筆者)

つぎに“I Remember Grandpa”、*Truman Capote*、“A Christmas Memory”について、コロンの使用パターンを整理すると〔表4〕のようになる。



〔表4〕

	“I Remember Grandpa”	<i>Truman Capote</i>	“A Christmas Memory”
(1)具体例の列挙	1	2	6
(2)補足説明	1	3	27
(3)強調／換言	2	0	3
(4)地の文の引用	12	16	17

〔表4〕の特徴は、つぎの2点であろう。まず、“I Remember Grandpa”と *Truman Capote* のコロンの使用パターンは概ね類似しているという点である。とりわけ、(4)「地の文の引用」の用法については、“I Remember Grandpa”が全体の75%、*Truman Capote* が76%と、ほぼ同じ割合である。それに対して、“A Christmas Memory”では(4)「地の文の引用」が32%にとどまっており、“I Remember Grandpa”、*Truman Capote* の場合の半分にも満たない。

もう一つの特徴は、(2)「補足説明」の用法に関して、“A Christmas Memory”においては全体の約半数(51%)を占めている点である。“I Remember Grandpa”ではわずかに1例であり、*Truman Capote* では3例にとどまっている。

総じて“A Christmas Memory”では、コロンの用法が変化に富んでいる。

これらの特徴から判断する限りでは、ともに自伝的短編小説である“I Remember Grandpa”と“A Christmas Memory”の作者を同一人物であるとみなすのは極めて難しい。

## 結び

Capote は Grobel との会話のなかで、こう語ったことがある。

「私が書いた最も初期の小説を読んでもらえば、私の文体がそれほど変わっていないことがわかるはずだ。もちろん、主題は変わったかもしれないが、文体は変わっていない……。」<sup>(12)</sup>

この発言を文字どおりに受けとめるとすれば、“I Remember Grandpa” の authorship を考えるうえで、文体は重要な判断基準となりうる。

Capote はコロンやセミコロンを多用する作家である。筆者はそのことを本稿の第Ⅰ節において指摘した。続いて筆者は、コロンやセミコロンもまた文体を特徴づける一要因であるとの仮説に基づき、“I Remember Grandpa”、*Truman Capote: The Story of His Bizarre and Exotic Boyhood by an Aunt Who Helped Raise Him*、“A Christmas Memory”を対象として、コロン／セミコロンの使用頻度に注目した。その結果、これら3作のコロン／セミコロンの使用頻度のみをもって“I Remember Grandpa”の authorship を判断する基準とみなすことができないことが判明した(Ⅱ節)。一方、コロンの使用パターンに注目すると、“I Remember Grandpa”及び *Truman Capote* と“A Christmas Memory”には大きな違いがあることが明らかであり、この差異により“I Remember Grandpa”の作者が Capote であるとの見方を疑問視せざるをえないという結論に辿りついた(Ⅲ節)。

“I Remember Grandpa”の authorship を考えるうえで、この遺作と Capote の諸作品を、文体上の特徴を比較の基準として読み直すことは、必要かつ有益な試みである。本稿では主としてコロンの使用パターンを基準として“I Remember Grandpa”、*Truman Capote*、“A Christmas Memory”を比較した。その結果、上記のとおり、“I Remember Grandpa”を Capote 作とみなすのは難しいとの結論に達したわけであるが、無論、比較の基準とすべき文体上のポイントは多岐にわたる。“I Remember Grandpa”の authorship については、それらの新たな比較基準に基づく考察がさらに求められるところである。

## 注

- (1) Capote, Truman. “I Remember Grandpa.” Atlanta: Peachtree Publishers, 1985.  
の編集後記参照。

- (2) Grobel, Lawrence. *Conversations with Capote*. New York: New American Library, 1985. pp.49-50. 参照。
- (3) Moates 著 *A Bridge of Childhood: Truman Capote's Southern Years* には、Capote と叔母 Mary Ida をめぐるさまざまなエピソードが紹介されており、彼が Mary を慕っていたことがはっきりと見てとれる。Moates, Marianne. *A Bridge of Childhood: Truman Capote's Southern Years*. New York: Henry Holt & Co., 1989.
- (4) Clarke, Gerald. *Capote: A Biography*. New York: Simon and Schuster, 1988. p.539.
- (5) 越智博美『カポーティ』勉誠出版、2005. p. 285.
- (6) Cochrane, James ed. *The Penguin Book of American Short Stories*. New York: Penguin Books, 1969. pp.265-418. 参照。
- (7) テキストについては、つぎの短編集を用いた。Capote, Truman. *The Complete stories of Truman Capote*. New York: Vintage Books, 2004.
- (8) コロンに比してセミコロンの用法は多様性を欠いており、“I Remember Grandpa” ほか2作品のセミコロンの用法を比較しても大差は生じないと考えられるために、コロンの用法のみを比較基準とした。
- (9) クリスタル、デイヴィッド『言語学百科事典』風間喜代三・長谷川欣佑監訳 大修館書店、1992. p. 291.
- (10) 筆者による分類である。時刻表示のコロンをはじめとする単なる記号としての用法は除外している。なお、(1)～(4)に付した例文は“A Christmas Memory” から採りあげた。テキストは *The Complete stories of Truman Capote* を使用し、引用文のあとの括弧内に頁数を記している。
- (11) コロンのあとが地の文の引用であっても、引用符が付されていない事例もある。  
〔表4〕においては、そのような場合も「(4)地の文の引用」に分類している。
- (12) Grobel、前掲書、p. 91.

